様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３８０

研究課題名（和文）文学と絵画の比較考察による作家兼風景画家の系譜化についての研究

研究課題名（英文）Research on the genealogy of writers who were also landscapists by comparing their literature and pictures

研究代表者
磯崎　康太郎（Isozaki, Kotaro）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（総合グローバル）・准教授

研究者番号：３０４０９５０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：学際的手法により、文学研究と美術研究とを活用した本研究では、ゲーテ、シュティフター、ケラー、そして20世紀のヘッセへと続く、ドイツ文学の作家による風景画の試みを再考し、かれらの風景画を相互に比較検討し、かれらが風景描写として描いた文学表現との関連性から、表現媒体の枠を超えた「風景」の意義を求めた。この成果を踏まえて、ドイツ文学史上、ペンと絵筆という二通りの表現手段を有していた作家兼風景画家についての系譜化を試みた。

研究成果の概要（英文）：This research project drew on literary and art studies, in an interdisciplinary way, aiming to reconsider landscape paintings and drawings by German writers in the historical line of Goethe, Stifter, Keller and Hesse in the 20th century, to compare their respective works with each other and to clarify their significance beyond the means of expression by putting them especially in the context of landscape depictions in the writers' literature. The results of this research sought to create a genealogy of German landscapists who used both a pen and a paintbrush, thus creating two ways of landscape depictions.

研究分野：人文学

キーワード：ドイツ文学　美術史　風景画　ゲーテ　アーダルベルト・シュティフター　ゴットフリート・ケラー　ヘルマン・ヘッセ

１．研究開始当初の背景

風景画は古来、象徴、事実、幻想、理想といったコードによって様式化され、19 世紀に時代の主導的芸術となるに至って、「市民的な自然描写の隠されたトポス」として隠喩的な意味をも担ってきた。本研究では、いまだ手薄な風景画解釈に資することを念頭に置きながら、そもそも美術研究の立場からはあまり顧みられることのなかったドイツ文学の作家の風景画を取りあげ、これらを文学における風景描写と比較検討し、作家兼風景画家の伝統を新たに考察するものである。作家兼風景画家は、絵画と文学という二通りの表現媒体を用いて、なぜ風景が描かれるのかという根本的な問題について、豊富な実例をもって回答を与えてくれる。ドイツ文学の作家の風景画については、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749-1832）によるイタリア旅行時の素描や水彩画の試みの後、19 世紀には、クロード・ロランの影響を受け、画業を生涯継続したアーダルベルト・シュティフター（1805-68）や、地元チューリヒの画家に師事したゴットフリート・ケラー（1819-90）といった風景画家を志した作家が登場する。さらに 20 世紀には、風景画を主とする 3000 点以上の絵画を残した、ヘルマン・ヘッセ（1877-1962）の画業が知られている。かれらの画業の試みは、作家ごとの個別的文献から概要が紹介されてきたが、これらの文献は、名が知られた作家の取り組みを概観する意図のもとで、画業に至る伝記的な背景を説明するものや、描かれた絵画の個別的な説明にとどまるものが主流であるため、作家間を越境してかれらの作品を考察することが今後の課題として挙げられる。

２．研究の目的

文学研究と美術研究とを架橋する試みとなる本研究では、かれらの風景画相互の比較考察を試みるだけではなく、かれらが風景描写として彫琢した文章表現と色彩表現との関連性から、個々の表現媒体を超えた風景というトポスの意味を明らかにする。この点を踏まえて、ドイツ文学史上、ペンと絵筆という二通りの表現手段を有していた作家兼風景画家について、時代的推移とは異なるかれらの系譜化を図ることを目的とする。

３．研究の方法

まず基礎研究として画集や研究文献から、ゲーテ、シュティフター、ケラー、ヘッセの風景画業への取り組みを概観し、十分な知識を蓄えた後に、かれらの風景画の検討に着手する。画集などの紙面からの考察を、現地調査としての絵画の実見によって補う。

風景画を描いた作家たちの動機づけと画業への意識について、かれらの共通点と相違点を整理した後に、文学の影響下にある風景画と絵画的な文学表現の特徴を探るなかで、風景の象徴的な意味を明らかにする。そして最終的に、本研究計画が扱う作家兼風景画家の全体的な異同、類似をまとめ、それらの相互関係からこの伝統を再構成する。

４．研究成果

本研究の成果として、4 人の作家兼画家について得られた個別的な知見をまとめ、その後に全体の総括として、4 者間の相違点、類似点を記したい。

（1）ゲーテ

約 3000 点もの作品を残した素描画家としてのゲーテは、とりわけ風景を好んで描いた。人物素描や自然科学研究のための素描なども残されてはいるものの、作品の大半が風景素描である。彼は、文学や自然科学研究の補助手段にする、あるいは文字と図との補完的関係を検討するといった明確な目的意識をもった素描を描いた一方で、とりわけワイマールでの最初の 10 年間には、恋人の不在や物事がうまくいかないときの焦燥感を埋め合わせる行為として、瞬間的な印象を風景素描として描きとめることも多かった。また、イタリア旅行から帰国後のゲーテは、1789 年から 1832 年までの数十年間に 1500 点以上の素描やスケッチを残したが、これらのなかには、楽しみや遊びやゲームとして描かれた作品も多数見られる。晩年のゲーテは人が集まるところで好んで画を描き、以前より気楽に自分の作品を人に贈り、素描を社交のための手段にもしていた。しかし、同時に彼は、自らの素描の腕前をつねに疑問視し、そこにジレンマを感じ続けていた。ときにそれを嘆いたり、ときに修行の断念を宣言したりしながらも、言行が矛盾するかのように、彼がつねにまた画筆をとってしまう理由として、素描が意識的には制御できない無意識の衝動を担っていたからであると考えられる。文学作品との関連では、『若きヴェルターの悩み』に描かれているように、自然に没入する経験は、描画に先立つ行為としてとりわけ重要だった。この経験は、彼の焦燥感を補償するとともに、文筆のモティーフとして活用されている。

（2）シュティフター

シュティフターの最初期の作品は、クレムスミュンスターのギムナジウム時代の水彩画と素描である。彼の絵の教師 G. リーツルマイヤーは、シュティフターの画業において唯一の絵の師匠と呼べる存在であり、彼に古ウィーン派の風景画（Altwiener Vedutenmalerei）の作法を教えた。とはいえ、この時分からすでにシュティフターは、自立した画風の絵も描いていた。彼の画業の歩みにおいてゲーテと決定的に異なるのは、まず油彩を本格的に手がけていたこと、そして職業画家としての活動も行っていたことである。シュティフターは、1839 年から 1842 年までにウィーンのアカデミー展などに 4 回出

品しており、さらには絵を売ることや、注文に応じて作品を制作することもあった。この頃のシュティフターは、周囲に風景画家であると自称し、その署名も残している。しかしその後、彼の絵には外的にも内的にも転機が訪れる。外的には文筆活動などによる画業の圧迫であり、内的にはこの頃から顕著になる芸術的理想の高まりが挙げられる。1848 年にリンツに転居した後から 50 年代にかけては、作家としての多忙さに加えて、教育視学官の職務も彼の時間と気力を奪い、しばらく絵は描かれなくなる。だが、1850 年代半ばになると、彼はふたたび熱心に絵を描き始める。熱心ではあったものの、これはもはや以前のように職業画家に応じた活動ではなかった。1854 年 2 月から死の一か月前となる 1868 年 12 月までメモが残された彼の画業日誌には、9 点の標題絵画が記録されているが、そのいずれもが完成をみることはなかった。シュティフターが未完にとどめたこれらの標題絵画とラッケンホイザーの森の素描数点には、彼の晩年に特徴的な「小さな線、鉤、曲線の痙攣し、渦巻くような集積体からなるグラフィック形式」が認められる。激しい動きを感じさせるこの線描は、水流のような動く対象に用いられている一方で、石のように動かない対象にも使われていることから、自然の目には見えない動態をも描き出そうとする試みだったと考えられる。

シュティフターの文学作品では、1840 年の処女作『コンドル号』から最晩年となる 1866 年の『森の泉』に至るまで、画家、あるいは画業をたしなむ主人公が数多く描かれている。空間をつくり出す絵画的要素は、情景の絵画的構成、視覚的表現の多用など、物語の時間的継起を圧迫するほどに強く影響を及ぼしている。とりわけ肥大化した風景描写という形で画筆の影響をとどめるシュティフターの文学作品は、空間芸術としての文学ともみなしうると考えられる。

（3）ケラー

チューリヒ中央図書館の所蔵作品に私蔵作品を合わせて、ケラーの画作として 98 点が残されているが、そのうち 85 点が 1834 年から 1843 年に描かれたものである。この 9 年間は彼が職業画家を目指していた時期で、まずは故郷のチューリヒで、1840 年から 1842 年の期間はミュンヘンで、彼は風景画家としての修業を積んだ。風景画の流行という当時の時代現象に対して批判的な目を向けつつも、この時代の趨勢のなかで画家を志したことは、彼がシュティフターと共通する点である。他方で両者の相違点として、シュティフターが、職業画家への道を断念した後も生涯に亘って画業を継続したのに対して、ケラーの場合、作家に転身した後に画筆を取ることは極めて稀になったことが挙げられる。ケラーにとって、画筆は社会的評価を問うための手段としての意味合いが強い。つまり、画家、画業はその成否が問われるものであり、この点はケラーの芸術家小説『緑のハインリヒ』における主人公ハインリヒ・レーの人生行路がよく示している。レッシング以来の定義である「空間芸術」としての絵画、「時間芸術」としての文学という区別は、ケラーにも十分意識されており、彼の絵画と文学の関係を考えるに際しても、まずは両ジャンルの相違を前提にしなくてはならない。しかし、それにもかかわらずケラーの絵画と文学には、生産的な相互関係が認められる。例えば、彼の 1843 年の絵画「中世の町」に描かれた情景は、「原ゼルトヴィーラ」とも指摘されている。彼の短編小説集『ゼルトヴィーラの人々』では、絵画として定点観測され、図面に切り取られたかのような町の伝統的情景が描かれながらも、物語としてこれらが時間的変化のなかで崩れていく様子が描かれている。ヴァルター・ベンヤミンによれば、ケラーの文学作品に現れる「風景は、その諸力でもって、ただ作用しつつ、人間存在の経済に介入してくる」。すなわち、ケラーの描く風景は風景そのものとして、自然の事物はそれ自体を目的として存在しているのではなく、人間の経済活動との関連において意味を与えられている。この自然観は、点景が多用された彼の絵画からも看取される。また、『緑のハインリヒ』の髑髏を一例とする、物語に登場するさまざまなモティーフは、その原型を彼の素描に認めることができ、描画が着想の源になっていたと考えられる。

（4）ヘッセ

第一次世界大戦による精神的危機に陥ったヘッセが、医師の勧めもあり絵筆を取り始めたとき、すでに彼は 40 歳になろうとしていた。しかし、この描画の試みは、以後生涯に亘って継続され、3000 点以上の水彩画が残された。「素人」という自己評価とともに、ヘッセがつねに述べている画業による「喜び」や「慰め」の心情は、第一次世界大戦の精神的危機を乗り越えるための所以となっただけではなく、この感情が「彼の文筆家の仕事や彼の精神的構造の重要な内的相殺」として機能していた点が重要である。ヘッセにとって描画は、社会的領域で評価を問うべき仕事として意識されていたわけではなく、何よりも「喜び」や「慰め」をもたらしてくれる表現手段として、自らの親密圏に置いておきたいものだった。ヘッセの最初期の絵は、1914 年の長編小説『ロスハルデ』の画家フェラグートが告げているような写実的な絵であり、細部にまで慎重かつ厳格すぎるほどの正確さをもって描かれたものである。この細部への執心とも言うべき傾向は、しかしわずか三年後の、ヘッセにとって転機となる第一次大戦の危機によって変化し、大胆な統合や抽象化の傾向が強くなる。同時代の表現主義の画家たちとの交流でも知られるヘッセの水彩画は、その流動性から「描かれた音楽」、

明るい色彩により「太陽エネルギーの獲得」を具象化している。画業において実践される芸術観、自然観は、その習作的な意義をもつ『ロスハルデ』の他、自然の抽象化の傾向については 1920 年の小説『クリングスゾルの最後の夏』のなかで具体的に表明されている。

（5）総括

上記の 4 人の作家兼画家について、画業が文筆業等の「重要な内的相殺」である傾向は、とりわけヘッセに顕著に認められる。この傾向はゲーテにも認められるが、素描が社交に供されていた点において、精神的補償以外の目的も有していた。他方で、たとえ一時であっても、職業画家を目指したケラー、シュティフターの場合、画業は社会性獲得の手段としての意味合いを持っていた。とくに、画家への夢が挫折した後、ほとんど絵筆をとらなくなったケラーの場合、自らの日常を彩ることが画業の目的だったわけではないし、これを芸術的な理想追求の拠り所にしたわけでもなかった。しかし、この他律的な画業は、文筆との相補的な関係性を形成するものでもある。画家としての挫折後にも画業を継続したシュティフターの場合、青年期に覚えた流行絵画の作法が、晩年に独特の展開を見せている。晩年の彼の画業は、社会的成果を問うものではなく、もっぱら自らの芸術的理想に資するものであると同時に、職務等の「内的相殺」に寄与するものであった。したがって、画業が親密圏に置かれ、癒しの手段であったのか、あるいは、公共圏で社会的成果を問うものであったのかという観点から大別すれば、前者に属するのは、ヘッセ、ゲーテ、晩年のシュティフターである。後者に属するのは、ケラー、青年期のシュティフターであると考えられる。また、彼らは多かれ少なかれ同時代の絵画傾向の影響を受けていたが、社会的成果を志向していた作家兼画家の場合、流行絵画の影響がより強く見受けられる。すなわちケラー、青年期のシュティフターの絵に見られる、名所的構図や理想的風景画の傾向である。ゲーテやヘッセ、晩年のシュティフターは、それぞれの趣向に応じて、必ずしも同時代的傾向に囚われない個性色豊かな風景画・風景素描を描いていた。

自らの画業を文筆に活かしていたという点では、4 人の作家兼画家全員に該当することである。4 人の作品に認められた、画業と文筆業との影響関係は、次のようにまとめられる。

A．絵筆・画筆から文筆へ

① 風景や情景描写の絵画的構成（例：空間的記述の拡大、前景・中景・遠景・点景の配置）
② 風景描写等に認められる豊かな色彩表現
③ 自然研究や小説中の場面、モティーフを、絵画・素描として事前に試行

B．文筆から絵筆・画筆へ

① 言語で表現された自然観、芸術観の実践としての素描・絵画
② 絵画・素描においても、視覚的には「見えない裏面」を描き出そうとする試み
③ モティーフなどの面で小説との対応関係が認められる、幻想的、想像的絵画・素描

4 人の個別的な作品から考察される、テキストと図像との関係性については、先行研究における議論の蓄積があるところなので、さらに時間をかけて検討しなくてはならない。また、作家兼画家同士の相互比較についても、引き続き、多面的な観点から考察しなくてはならない。これらの点を今後の研究課題として挙げたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 磯崎康太郎、「19 世紀中葉の〈里地〉から生まれる悲劇――ゴットフリート・ケラー『村のロメオとユリア』における場所に関する考察」、ASLE-Japan／文学・環境学会『文学と環境』20 号、24-34 頁、2017 年、査読有。
② 磯崎康太郎、「視覚的媒体の誘い――『ロスハルデ』と画家ヘッセ」、日本独文学会北陸支部『ドイツ語文化圏研究』12 号、1-34 頁、2015 年、査読有。
③ 磯崎康太郎、「風景に溶け込むドイツ文学の画家たち――ゲーテ、シュティフターの場合」、世界文学会『世界文学』120 号、32-45 頁、2014 年、査読有。

〔学会発表〕（計２件）

① 磯崎康太郎、「文学モチーフとしての〈里地〉とその公共性――G・ケラーの短編集『ゼルトヴィーラの人々』から」（シンポジウム「自然へのまなざし――19 世紀ドイツ語圏の環境と文学」中の発表）、ASLE-Japan／文学・環境学会第 22 回全国大会、2016 年 8 月 22 日。

〔図書〕（計１件）

① 青地伯水、吉田孝夫、松村朋彦、須藤秀平、児玉麻美、西尾宇広、磯崎康太郎、川島隆、勝山紘子、友田和秀、永畑紗織、松籟社、『文学と政治――近現代ドイツの想像力』、2017 年、総 344 頁（担当箇所「第 6 章 〈三月後期〉の政治的リアリズムと詩的想像力――ヘッベルのドイツ統一思想」：179-208 頁）

６．研究組織

(1)研究代表者

磯崎　康太郎（ISOZAKI KOTARO）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部
門（総合グローバル）・准教授
研究者番号：30409502